

厚真の虎毛 5部 トラクマは死んだ

第1章 八甲田山での北海道犬の搜索活動

酒宴は続いた。

平蔵おじさんも樽前先生も、それに美笛^{びふえ}さんもかなりテンションが高くなってきた。お酒の飲めないお父さんまで真っ赤な顔をしてへらへら笑っている。

「ところで・・・」

樽前先生が真面目な顔をして話し始めた。

「北海道犬はかなり優秀な犬であることが歴史的にも証明された事件のことを知ってますか？」

「歴史的に・・・ですか？」

美笛^{びふえ}さんが驚いて返事をするとなぜか一斉に笑いが起こった。

楽しい雰囲気だからちょっとした冗談や「大きな話」にリアクションも大きくなった。

「いや、本当なんですよ。」

樽前先生は笑われたせいか、少しムキになってみんなを見回しながら言った。

「八甲田山で陸軍の歩兵連隊が遭難した時の話ですよ。」

「映画にもなったあの話ですね。もちろん知ってますよ。」

お父さんが答えた。

「そうです。確か明治35年だったと思います。」

「あの事件は悲惨でしたね。私は映画でその事件について知ったのですが、そうそう、映画では確か高倉健が徳島大尉で北大路欣也が神田大尉（注）でしたね。神田大尉の部隊が大人数でほとんど遭難死するんではしたよね。」

「そうなんです。神田大尉の部隊は210名中199人が死んだのですが、37名の徳島大尉の部隊は全員帰還するんです。実はこの時の遭難者の搜索に北海道犬が大きな役割を果たしているのです。」

「それほんとうですか？」

今度は美笛^{びふえ}さんが驚いて聞いた。

「ものの本に書いてありました。当時、大勢の搜索隊を投入してもなかなか遺体の発見が出来なかったのですが、北海道犬が嗅覚、視力、聴覚などバランスがとれていて、特に雪上の嗅覚が優れているということで引っ張り出されたようです。」

「なぜ、アイヌ犬の名前が挙がったのでしょうか？」

「さあ、それはわかりませんが・・・」

「それはこんな風に聞いていますね。」

そばで聞いていた平蔵おじさんが言った。

「何でも、アイヌ犬による搜索を決めた連隊長は、かつて旭川第7師団に勤務したことがあったそうです。旭川時代、冬に遭難者が出た時、アイヌ犬の救援依頼をした経験があ

ったそうです。アイヌ犬が雪中における嗅覚や帰巢本能に優れた犬であること知っていたからなんですね。」

「どこから北海道犬を連れて行ったのですか？それにどんなルートで話が伝わったのでしょうかね。」

お父さんが聞いた。

「詳しくは知りませんが、何でも八雲町の落部（おとしべ）という所に住んでいたかつての軍医を通して話が伝わったそうです。その軍医はオトシベコタンで長老をしていた弁開胤次郎という人をお願いしたそうですよ。弁開は気がすすまなかったようですが、この軍医がアイヌ部落での診療を熱心にやっていた人だそうで、そのこともあって引き受けたと聞いています。もちろん大量遭難という悲惨な事故ということもあったと思いますが。」

「それでどうなったのですか？」

「弁開は同じ部落のアイヌ人6名を連れて二日後には現地に到着したそうです。それぞれ持ち犬のアイヌ犬を連れてね。弁開一行が到着したときには捜索が遅々として進んでおらず大変な状態であったそうです。しかし、アイヌ人とアイヌ犬による捜索が次々と成果を上げていったというので評判になったそうです。当時のアイヌ人は雪山の経験が豊富であったこととアイヌ犬の嗅覚と探索の能力が実践的に鍛えられていたからだだと思いますね。」

「それにしても、シェパードやセントバーナード犬などの山岳救助犬ではなくて北海道犬とはね。」

お父さんがまた言った。

「それは臭いだけではないからでしょうね、雪山の捜索は。そのことを連隊長はよく知っていたんでしょね。その時、アイヌ犬に与えられた任務は単に遺体や遺品の発見ということだけではなくたと思いますね。他にも、捜索隊の歩行路の安全確保ということが求められたと思います。これは二次災害を出さないために必要不可欠なことです。捜索隊の歩行路や捜索箇所は一般道路ばかりではありません。むしろ普段歩かない危険な所の方が多いのです。」

平蔵おじさんはそう言って、ひと呼吸をおいてからまた話し始めた。

「例えば、雪庇（せっぴ）になっていたり雪の下が凍って氷になっていたり、崖があったりします。アイヌ犬は何度も雪の中に首を突っ込んで臭いを嗅ぎながら状態を確かめ危険箇所を避けて進むので、犬の後をついていけば足を踏み外すことなく安全に前進することが出来たのです。遺体、遺品の発見についても猟犬として獲物の発見などに十分訓練されていますので雪中に埋没した小さなものまで嗅ぎ当てたと聞きました。」

平蔵おじさんの話の後、その場が急に静かになった。話を聞いていた全員が北海道犬の優れた能力に感動している風であった。

(注) 史実は神田大尉は神成大尉、
徳島大尉は福島大尉である。

2章 色と臭い

この話のあと犬の習性の違いや北海道犬の毛色や嗅覚の敏感さなどについて話に花が咲いた。

「どうも、日本人は言葉に対して曖昧だ。」

樽前先生が言った。

樽前先生は酒が入ると理屈っぽくなるタイプらしい。

でも、他の人はそれほど気にならないみたいで、うんうんと話を聞いていた。

「例えばですね、犬の毛色を言う時に赤とか赤虎毛とか言いますよね。僕はおかしいと思うんですよ。あれは赤ではなく茶色なんですよね。もちろん茶色にも幅がありますけどね。いずれにしても赤ではないと思うんですけどね。」

確かにそうだと僕も思った。

「そう言えば、似たような言い方は他にもありますね。」

お父さんが言った。

「例えば、青葉って言いますよね。葉っぱは緑なのに青って表現しますよね。」

「確かにそうですね。若いという意味で青という色を使いますね。青臭いとか青二才とかね。」

今度は美笛びふえさんが言った。

「言います。言います。私、たまに言われることがありますよ。」

樽前先生が言ったので一斉に笑いが起こった。

「まさか！」

お父さんが言った。

「尻が青いのに・・・なんて言い方があるから、そこから未熟さとか若さが青と結びついて出たのかも知れないね。」

平蔵おじさんが言った。

「赤ん坊の時に尻の青いのは、モンゴロイドの特徴ですからね。もしかしたらモンゴロイドの国々の言葉の中に若さや未熟さを青で表す言葉があるかも知れないね。樽前先生、調べてみてくださいよ。」

今度は美笛びふえさんがちょっとからかう調子で言ったものだから一斉に大きな笑い声が起こった。

「英語では未熟とか青二才を表す言葉の中にグリーンという言葉がありますね。つまり緑ですよ。おもしろいものですね。」

樽前先生が笑いの中で言った。

「まあ、確かに日本人の色の表現は昔に比べたら雑になっていることは確かですね。例えば・・・茶系統の色は檜皮（ひわだ）とか蘇芳（すおう）とか胡桃色（くるみいろ）などと区別していましたね。赤もそうでしたよ。紅（べに）とか紅色（くれないいろ）とかね。今は単に茶色とか赤とか。それに薄いとか濃いとかくをくっつけたものくらいですからね。」

「いやー、感じちゃうものがありますね。塩岡さんがいま言った色の表現は日本の色というのか大和の色というのかなあ、すごくいいですね。」

樽前先生が一人感激しながらそう言った。

「もしもですよ、紅とか紅色などの昔の色の表現が化学実験などで使われるとしたら、かなり実際の色に近い表現になったと思いますね。リトマス試験紙の色を赤と青の区別をしますが、実際の色は赤でも青でもないんです。うすはげたピンクと鼻水でも垂らしたような中途半端な薄い青っぽい色なんです。なんでそんな色を赤とか青って言わせるんでしょうね。それを子どもに覚えさせるんですからね。他の化学反応の色の場合も同様ですよ。実際の色にあった表現がないのかっていつも思っていますよ。」

いかにも不満だとばかり言葉に力を入れて言った。

「なるほど、日本の色、大和の色ですか。いいですね。私にはその表現の方が感覚的によくわかりますね。私が子どもの頃読んだ本にこんなのがありましたね。壇ノ浦で敗れた平家の二位の尼が、この方は平清盛の奥さんであった人ですが、幼い安徳天皇を抱いて船から身を投げたんですね。このとき鈍色（にびいろ）の衣装を身につけていたというのです。今、思い出しましたよ。」

平蔵おじさんはそう言った。

「にびいろ・・・ですか？」

樽前先生が聞いた。

「そうです。黒っぽくて灰色がかっている感じの色です。墨染（すみぞめ）とも言いますが・・・」

「では、鼠色に近い色ですか？」

「そうですね。濃い鼠色ですね。」

「そう言えば・・・」

「中原中也の詩に【臨終】というのがあるのですが、その中に【秋空は鈍色（にびいろ）にして】・・・と言う一節があるんです。詩人の中には、その大和の色を使う人もいますね。」

その時、三人の話を聞いていた美笛さんが言った。

「なるほどね・・・。でも、色の場合はまだ良いかも知れませんよ。とにかくにも色には名前が付いているのですから。先ほどアイヌ犬の臭覚の話も出ましたが、臭いそのものについての表現が、少なくとも日本語にはないと思うのですがどうでしょうか？ 例えば、タクワンの臭いとかリンゴの臭い、ミカンの臭い、魚の臭い、それにおならの臭い・・・そんな風に何々の臭いというように、臭いの前には必ず物質の名前が付いていますよね。つまり臭いそのものを示す言葉がないように思うのですがどうでしょうか。」

「それもそうですね。たしかに臭いそのものを表す言葉がないように思いますね。」

お父さんが言った。

「これは日本語だけのことなのではないでしょうかね。外国語の中には、臭いそのものを示す言葉があるのでしょうか。」

美笛さんの言葉には誰も応えずに「さー？」と言ったきりだった。

「臭いに関しては確かに人間よりも動物の方が敏感ですよ。特に犬はかなり敏感ですよ。それに犬の中でもシェパード犬やセントバーナード犬はかなり嗅覚能力が高いようですが、同じ犬でもどうしてそういう差がつくんでしょうね。」

美笛^{びふえ}さんはそうつけ加えて言った。

「それは臭い受容体群の数が違うからでしょうね」

樽前先生が言った。

「臭い受容体群ですか？それって何ですか？」

「臭い受容体群というのは、臭いを受け取るタンパク質の名前なんです。これと嗅覚システムの関係を明らかにしてノーベル賞をもらった人がいるのです。アメリカ人の女性科学者でリンダバックという人なんですけど、この人は動物が臭いをどのように一つ一つ区別して感じ取ることが出来るのか、その仕組みについて研究したんです。」

「難しそうですね。でも、おもしろそうですね。」

「それで何がわかったのですか？」

平蔵おじさんが聞いた。

「私も詳しくはわからないのですが、一つは臭いを受け取る受容体群の数が動物によって違っていることを具体的に明らかにしたみたいですね。人間の場合は350種類ありマウスだと1000種類くらいあるとか。それから伝わり方のメカニズムなんかも解明したそうです。」

ひよんな事からノーベル賞の話まで飛び出したが、それぞれに疑問を出したり自分の意見を言ったりしながら楽しい1日を締めくくったようだった。

3章 トラクマの死

今朝、トラクマが死んだ。突然の死だった。

トラクマが我が家に来てまる5年経ってのことだった。

獣猫競技会で優勝してから1年半がたっていた。

年が明けたら僕が中学生、リナミが小学校6年生なるという時だった。

死ぬ前の晩、この冬4度目の雪が降った。

3度目の雪が12月中旬に降り、このまま根雪になるのではないかと思われていたのに、その雪もあっという間に融け、今年の根雪は遅いと互いの挨拶の中で話し合っていた。

思えば今年の春から兆候はあった。

時々、餌を残すことがあって、それはそれでちょっと気になったけど普通に時を過ごしていた。

それが、つい最近になって散歩の途中で座り込んだり家に戻ろうとしたりしたことが時々あった。

そんな時、ちょっと変だなーって思ったんだけど、すぐいつものトラクマに戻っていたので大して気にしないでした。

飼い主としてはかなり鈍感だったとしか言いようがない。

トラクマが死ぬ前の晩、僕はトラクマを連れ夜の散歩に出かけたが、いつもの元気がなく、仕方なく散歩に付き合っているという風だった。

歩き方もいつもとはかなり違っていた。

ずいぶんゆっくりでノロノロっていう感じだった。

トラクマは完全に病気だと思った。

明日、お父さんに病院へ連れて行ってもらおうと思った。

その時、突然、トラクマは立ち止まり動かなくなった。

「トラクマ、大丈夫か？」って聞いたけれど身動きをせずジーッと立ったままでいた。

「戻ろうか？」

そう言って綱を引いたけれどトラクマは石のようにジーッととして全く動こうとはしなかった。

「これはまずい！」と思って抱きかかえてみたけれど重くてとてもだっこして家まで帰ることが出来なかった。

「トラクマ、待ってろよ。」

そう言って大急ぎで家に戻りプラスチックのソリを持ってトラクマの所に戻った。

トラクマは黒い石の塊のように道路にうずくまっていた。

「トラクマ、大丈夫か？」

そう言って、なんとかだっこして橇に乗せ、土と橇のすりあう音を聞きながら家に連れ戻った。

「お母さん、トラクマが重病だよ。全く歩けなくなっているよ。癌か何かじゃない？」

僕の声聞いてお母さんとお父さんが出て来た。

「トラクマ大丈夫か？」

お父さんとお母さんが代わる代わる声を掛けた。

リナミは丁度、札幌のおじちゃんの所に出かけていた。

トラクマはただジーッと目をつむったまま全く動かなかった。

ただ、ゆっくりと大きく息をしていた。

「今晚、玄関に入れてやろうよ。」

そう僕が言ったのに「いや、犬小屋でいいよ。あそこにはワラが敷いてあるから。」とお父さんが言った。

そして「明日、病院へ連れて行ってやるから。」とつけ加えた。

僕は不満だったけれど、お父さんが言うのだから仕方がないと思ってその通りにした。

その晩は久しぶりに冷えた。

僕はトラクマのことが気がかりでどうしようもなかった。茶の間のカーテンを開けて、灯りを犬小屋に届くようにした。

トラクマは、犬小屋から少し体を出して光の方に目を向けていた。

「トラクマ頑張れよ！」

僕は窓を開けてトラクマに声をかけた。

その夜、風の音を聞きながらベットに入った。

外は吹雪になっていた。

元気の良い時のトラクマなら、マイナス20度を超える夜でも、吹雪の中、平気で体を丸くして眠っていた。

しかし、今日は違う。

今日のトラクマにとって今夜の寒さはきつ過ぎる。

トラクマは耐えられるだろうか？・・・と思った。

とにかく、明日、朝早く病院に連れて行かなければと思った。

「なぜ、もっと早く気づいてやれなかったのだろう。」
後悔の気持ちで一杯になった。
ひゅーひゅーと風の音が聞こえている。天気予報通り吹雪になったと思った。

朝になった。
僕はいつもより早く目が覚めた。ベットから飛び起きて急いで茶の間に行きカーテンを開けた。

吹雪はすっかり止んでいた。空には月がくっきりと浮かんで見えた。
薄暗い外の景色がすっかり雪化粧していた。庭の枯れ木や枯れた草花の上に雪は白い花を咲かせていた。

近所の家々や車庫の屋根や軒先に雪が積もっていた。
トラクマの小屋も白い雪に包まれていた。そして、その入り口にこんもりとした雪の塊があった。

「ハッ」とした。「もしや！」と思った。
僕の体に緊張が走った。
僕は急いで着替えをすませ長靴を履き風除室の戸を開けた。そして、雪の上に足を踏み出した時、雪が長靴に入ってしまうほど降り積もっていた。

今日のこの雪で完全に根雪になったと思った。
僕は雪をこいで裏の庭に続く狭い小路を歩いて犬小屋に向かった。
僕はトラクマの小屋の入り口に立って改めてこんもりとした雪の塊を見た。
トラクマは夕べ窓から見た時と同じ姿勢で死んでいた。
僕はトラクマの頭部や前足に乗った雪をそっと取り除いてやった。
そして急いで家に戻りお父さん達の寝室に行き「トラクマが死んだ！」と叫んだ。

「なに！トラクマが死んだ？」
お父さんが言った。
お母さんもかなり慌てて飛び起きて来た。三人でトラクマのそばに立った。僕はトラクマの首輪についていた鎖をはずしてやった。そして体をそっと抱きかかえるようにして犬小屋の奥に動かして藁の上のせてやった。

トラクマを両手で抱えた時、僕の眼から涙がポロポロこぼれてトラクマの体を包んでいた雪を融かした。

その時、トラクマがとてもかわいそうに思った。
「トラクマ、死んだのか」
お父さんは独り言のように言った。
「やっぱりもっと早く病院に連れて行けば良かったネ。かわいそうに。」
お母さんが繰り返しそう言った。
「やっぱり、昨日、玄関に入れてやれば良かった。」とも言った。
「寿命だな。寿命だよ。そう考えるしかないよ。」
お父さんが言った。
お父さんって案外、冷たいなーってそのとき思ってしまった。
お父さんもお母さんも泣かなかったけれど目に涙を浮かべていた。

3人でしばらくトラクマを眺めていた。

「朝食を食べたら、まず、リナミと平蔵おじさんに連絡しよう」

お父さんが言った。

平蔵おじさんは連絡を聞いてすぐ来てくれた。

「トラクマは良い飼い主に飼われて幸せでしたよ。いつもかわいがってもらって」
平蔵おじさんはそう言ってから「散歩にもいつも連れて行ってもらったし獣猫競技会では優勝したしね・・・」と付け加えた。

連絡を受けたリナミが昼過ぎに戻ってきた。

手にひと束、花を携えていた。

リナミは家に着くなり真っ直ぐトラクマの小屋に行った。

茶の間から、リナミの帰ったことを知り僕たちは慌ててトラクマの小屋に行った。

お父さんとお母さん、僕とリナミの4人がトラクマの前に立った。

リナミはトラクマを見ると「どうして首輪をはずしてやらなかったの？」と言って、そばに立っていた僕たちをちょっとにらんだ。

そう言えば、鎖は外してやったけど首輪をはずし忘れていた。

リナミはトラクマの首輪をはずしながら「もう、自由だからね」と言って何度も何度もトラクマの頭をなでていた。

ポロポロと涙が落ちてトラクマの顔を濡らした。

それからトラクマの上に花を添えた。

4章 青天のへきれき

トラクマが死んで1週間ほどして新しい年が来た。

三が日が明けて間もなく、平蔵おじさんから電話があった。

「今日の昼過ぎおじゃましたのですがよろしいですか？ちょっとお話がありまして、皆さんがいるときが良いのですが。」

平蔵おじさんはそう言った。

「何の話だろうね？」とお母さんが言った。

「皆さんがいるときが良い。」という言葉が気になったらしい。

午後1時を少し過ぎた頃、平蔵おじさんがやってきた。

「今年もよろしくお願いします。」

互いに新年の挨拶を交わした。

「去年はどうも。」

平蔵おじさんは、そう言ってから「トラクマの火葬料はどのくらいかかりましたか？」と聞いた。

トラクマは苦小牧のペット霊園で焼いてもらい、そのまま犬の共同の墓に入れたことを言っているのだ。

「焼いて墓に入れてもらって3万円でした。それに卒塔婆（そとば）と言うのですか？共同墓の側に黒塗りにした名札ですね。それにトラクマって名前を入れてもらいました。それが2万円でしたね。永代供養にしてくれて毎年、坊さんに拜んでもらえることになり

ましたので。」

「トラクマは幸せですよ。そこまでしてもらって。」

お母さんと僕とリナミは二人の話を黙って聞いていた。

平蔵おじさんの話して何だろう。

「また新しい犬を飼ってみてはどうですか？」という話かな。

僕は勝手に想像しながら話が本題にはいるのをジーッと待っていた。

「犬の火葬場と聞いておりましたので、それだけの所かと思っておりましたが、そこには犬や猫やその他のペットの墓があるんですよ。予想外のことでしたのでびっくりしました。」

「犬や猫の墓に・・・永遠の家族です・・・とか、愛を有り難う・・・とか、いろいろ書いてあるものを読んだのですが、胸が熱くなりましたね。」

お母さんが言った。

「そうですね。ペットは家族同様ですからね。」

「このペットたちは幸せだなーって思いましたね。」

「そうですね。でも、トラクマも幸せでしたよ。」

お父さんとお母さん、それに平蔵おじさんの3人はそんな会話を交わしながら、とにかくトラクマに関する話が一段落した。

その時、おじさんが少し言いくさうに「実は・・・、今ごろこんな話をして申し訳ないのですが、トラクマに子供がいるんですよ。」

「ハアー？」

みんな腰を抜かすほどびっくりしてしまった。

「えー？」

再びお父さんがそう言ってから「どういう事ですか？」と聞いた。

「実は・・・年が明けましたのでおとしになります。おとしの7月、こちらの家族が東北に旅行に行ったことがありましたよね。その時、私の方でトラクマを預かりましたでしょう？ あの時なんですよ、実は。えりも町の百人浜の近くにアイヌ犬を飼っている日高さんという方がおましてね。漁師をされている方なんです。その方がどうしても厚真の虎毛の子が欲しいと言いましてね。それで良い婿さんはいないかって頼まれたんですよ。猟獣性の高い虎毛をという希望でしたので、それでトラクマのことを思い出しましたね。何と言っても猟銃大会で1位になっていますね。その時、丁度、お宅が留守だったものですから・・・それにメスの方には発情期がありましてね。その時が一番、良い時期だったものですから、つい断りもなく交配してしまったのです。本当に申し訳ありません。」

お父さんもお母さんも突然のことでびっくりしてしまっていて言葉が出ないのでおじさんの話をもっぱら聞いていた。

「それで、トラクマの子供が現在、えりも町にいます。申し訳ないとは思いますが・・・時間が経つにつれてますます言いくさうになりますね。」

平蔵おじさんは恐縮しながらそう言った。

僕やリナミやお父さん、お母さんはお互い顔を見合わせながら、まだ驚きの中にいた。鳩が豆鉄砲を食らったっていうのは、こんな時のことを言うのだらうと思った。

「いやー、わかりました。」

お父さんはそう言ってからも、本当にびっくりさせられたという顔をして言った。

「それにしても今まで黙っていたなんて水くさいですよ。」とやっとの事で言った。

「本当に申し訳ありません。その点に関しては一言もありません。」

平蔵おじさんは重ねてお詫びの言葉を言った。

その時、お父さんは少し笑顔になって言った。

「そう言えばトラクマの種付けについては、坂間さんからの帰り道、車の中で平蔵さんから聞いていましたね。」

お父さんは思い出したようにそう言った。そう言えばそうだったと僕も思った。

「ええ、それはそうなんですけど、・・・その後も何も言わないでしまっって・・・」

そう言ってまた頭を下げた。

「イヤー、平蔵さん、そんなに謝らないで下さい。私は突然だったのでびっくりしましたけれど、実はとってもうれしいのですよ。」

お父さんはそう言って平蔵おじさんを慰めた。

僕ももちろん、お母さんも、リナミもとってもうれしそうだった。

「トラクマの子供がいる！」

僕は何度も何度も心の中で繰り返した。

家族みんなが同じ気持ちだった。

「ところで平蔵さんはトラクマの子供を見たことありますか？」

「ええ、誠に言いにくいのですが、生まれた時に1度見えています。申し訳ありません。」とまた頭を下げた。

「そうですか」

そう言ったときのお父さんはちょっと悔しそうだった。

「ところでトラクマの子供は何匹いるのですか？」

「3匹です。ただ、虎毛は1匹だけだったのです。それというのもトラクマのお嫁さんは赤毛のアイヌ犬でしてね。ただ赤毛と言いましても祖母、曾祖母に当たるのが虎毛だったので虎毛が生まれる確率は高かったのです。虎毛が1匹に赤毛が2匹だったそうです。」

「3匹とも、その日高さんという方が育てているのですか？」

「いえ、虎毛は日高さんが育てていますが、他の犬は、それぞれ知り合いに譲ったそうです。」

「では、えりも町の日高さんの所に行けばトラクマの子供に会えるわけですね？」

「もちろん会えます。虎毛の子犬はトラクマの子供の時とそっくりですよ。敏捷で慎重なところなんか。」

「そうですか。」

お父さんはうれしそうに言った。

「その方は虎毛のアイヌ犬が手に入ったと言って喜んでいます。」

「それで・・・その虎毛はオスですか、メスですか？」

「オスです。」

「そのトラクマの子供にすぐにでも会いたいのですが、会わせてもらえますか？」

お母さんが言った。

「もちろんです。すぐ連絡とりましょうか？」

「おねがいします。」

「えりも町は遠いけれど天気良ければ車で行けるね」

お母さんが言った。

「冬だから6時間はかかるだろう。」

お父さんが答えた。

平蔵おじさんが帰った後、4人は互いに言い合った。

「トラクマの子がいたんだ。是非、会いに行こう。」

家中が一気に盛り上がった。

それから間もなくしてえりも町の日高さんと連絡がついた。

そして、ついに、明日、訪問することになった。

明日は日曜日、しかも成人の日だ。天気予報は晴れ。

朝、5時半出発。

お父さんの運転で日高さん宅を訪問することになった。

冬道だけれど太平洋側の海岸線だから雪はそれほど多くはないだろう。

出発時間の5時半は、夜明けまでに1時間半もある。車は暗い中を走ることになるが、往復の時間を考えて早朝の出発とした。

みんなピクニックでも行くように笑顔で、うきうきしている。

「襟裳岬の風は強いだろうね。」

お母さんは言った。

僕は、トラクマの子を育てている人が、百人浜に住んでいると聞いて、以前、お父さんから聞いた話を思い出していた。

江戸時代に南部藩の御用船が百人浜沖で難破しこの浜で100人の乗組員が息絶えたという話だ。それが百人浜の名の由来だと聞いた。

それと・・・NHKのプロジェクトXという番組で取り上げていた「えりもの海が蘇った」という話だ。

えりもの森の伐採のため泥水が百人浜に流れ込み、多くの海草が死に、海が茶色になった話。そして、この死んだ海の回復のため漁民が50年もかけ、試行錯誤を繰り返しながら、クロマツの植樹を成功させ森を蘇らせた話。

僕の中でプロジェクトXの話とトラクマの子供の姿が重なってきて、とっても幸せな気分になった。

参考文献・資料

「書籍、新聞」

- 北海道犬の話（渡辺 洪 北海道出版企画センター）
北海道犬のはなし（土屋 良雄 北海道新聞社）
北海道犬（愛犬の友編集部 誠文堂新光社）
犬の現代史（今川 勲 現代書館）
この犬が一番（富沢 勝 草思社）
犬から探る古代日本人の謎（田名部雄一 PHP研究所）
ニホンゴキトク（久世 光彦 講談社）
北海タイムス（昭和57年1月1日）
民報（苫小牧民報）（平成6年12月10日）

「ビデオ、テレビ」

- 日本人のルーツを探れ（NHK）
科学のフロンティアを拓く（NHK）
アジア 犬紀行（NHK）
日本人はるかな旅（NHK）

「Webサイト」

- 川上村
川上犬

日本人はるかな旅展
天然記念物北海道犬保存会
天然記念物北海道犬協会
幻の天然記念物 越の犬
日本犬
北海道犬とは
山陰柴犬をご存知ですか？
柴犬
犬の大辞典
コシヒカリ
日本人のルーツはブリヤート？
縄文人「日本人は縄文人と渡来弥生人のハイブリッド」
M + D N Aで判ること